

南館信也氏聞き取り

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学史資料センター 公開日: 2020-01-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 悦志, 富澤, 成實, 小笠原, 渉, 村松, 玄太 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20584

【座談・インタビュー】

南館信也氏聞き取り

聞き手

吉田悦志	富澤成實	小笠原	村松玄太
------	------	-----	------

明治大学応援団の第一応援歌「紫紺の歌」(応援指導部(当時)作詞 古賀政男作曲)は、一九四一(昭和一六)年に成立し、現在に至るまで広く愛唱されている。このたび大学史資料センター昭和歌謡史研究会(代表 吉田悦志)国際日本学部教授では、同曲の作歌に携わった明治大学OB南館信也氏(一九一九年生まれ。九九歳。明治大学を一九四一年卒。岩手県宮古市在住)に聞き取りを行った(聞き取り日 二〇一八年一月二日 金曜日 会場 宮古ホテル沢田屋)

南館氏は、応援団が廃止され、応援指導部に改組された時期の団長として、同曲作詞公募や詩句の調整に携わり、古賀政男への作曲依頼を行った。同氏からは、詳細があまり知られていない応援指導部の活動実態や、「紫紺の歌」

の作歌経緯、古賀政男についての印象はもとより、当時の学生生活や応援団での活動、そして学徒練り上げ卒業の経
験など、貴重なお話を伺うことができた。

聞き取りにあたっては、小川由美子氏（同氏次女）、南館恵利子氏（同氏三女）、明治大学校友会岩手県支部長中村世
紀氏、明治大学OB会宮古駿台倶楽部会長加藤俊郎氏、同安藤陸男氏、同北館文吾氏のご支援を頂いた。ここに篤く
御礼申し上げる。

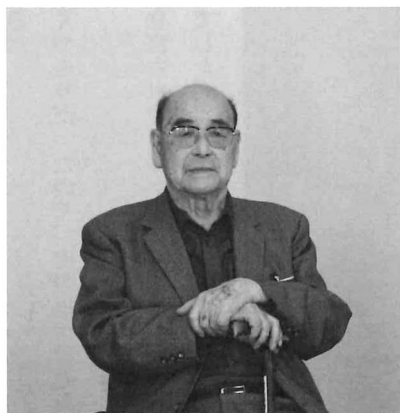
本聞き取りはJSPS科研費JP16K02337の助成を受けた。

（追記 校正作業さなかの二〇一九年二月、かねて病に臥されていた南館信也氏が逝去された。ご生前のご厚情に深
く感謝するとともに謹んで哀悼の意をささげる。）

明治大学への進学

——本日はよろしくお願ひします。当時、宮古から大学に進まれる方
というのはそれなりにおられたんでしょうか。

南館：宮古から大学に行くのは毎年大体三人くらいでしたね。私も学
校を終わってから予備校へ入りました。東京の日進予備校というところ
です。それで一年浪人して、一九三八（昭和一三）年に明治に入り
ました。毎日テストをやっているから誰がどの程度の成績か予備校で
きちんと分かるんですね。それで、明治の政経と早稲田の法学部を深



南館信也氏

南館信也氏聞き取り（吉田・富澤・小笠原・村松）

けて、無事両方合格しました。

その前に北海道帝国大学に進学する話もあったのですが、私は東京に行くつもりだったので、その道へは進みませんでした。

——小学生時代から柔道をたしなまなれ、岩手県立水産高校（現・岩手県立宮古水産高等学校）時代は、東北六県の柔道大会で優勝されたそうですね。明治大学は戦前から柔道が盛んな大学でしたが、明治大学柔道部にお入りになるうとはお考えではなかったんですか。

南館…入りませんでしたね。ちなみにその時の明大柔道部のキヤプテンは、盛岡中学を卒業した佐藤春生さんという方でした。

——「柔道をやらないか」と誘われたりはしなかったですか。

南館…誘われませんでしたね。最初から断っていました。

——早稲田には進まれずに明治に行かれたのは、どうしても政治経済学部がよかったということでしょうか。

南館…私は小学校時代から明治大学に憧れていました。

——憧れるきっかけみたいなことはあったんですか。

南館…私の親父が働いていた製材所の所長さんが明大の柔道部の選手だったんです。ナカシマさんという方でした。

——そうなんですか。柔道もそれで始められたんですか。

南館…いや、柔道はすごく好きでその前からやっていました。



3列目左から5番目が南館氏

——ご自分もされていた柔道が強い明治大学出身の所長さんに出会って、明治大学への進学を決められたということですね。

南館…そうそう。

大学生活

村松…明治大学にご入学されてサークル活動は何か入られたのですか。

南館…私は小学校からずっと無欠席でした。そういうことも大学の入学願書に書いてあったのか、大学の中に明治大学精神国防研究会⁽¹⁾というのがあります、それに勧誘されて入りました。

村松…精神国防研究会でどんな活動をされていましたか。

南館…周囲の国と親しくしたほうがいいのではないかと、中国語を中心に研究をしていましたね。⁽²⁾内原青年訓練所（水戸にあった満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所か）というのがありましたが、そこへ一年に二回、一週間くらい行くのですよ。そこでいろいろな村の方々とお話をして、学生の頭を切り替えるような運動をやっていたのですね。館長は加藤莞爾さんでしたかね。

——団員の研究会のメンバーの方はどれくらいおられましたか。

南館…三十人くらいでしたね。

——大学ではどのような先生が印象に残っていましたでしょうか。

南館…やはり、赤神良讓先生ですね。話題にされる分野が多かったですからね。

南館（信也氏聞き取り（吉田・富澤・小笠原・村松））

—— お話が面白かったですか？

南館…学生を引き付ける話題をされました。社会主義的なことも、本当にクローズアップしてお話できるような先生でしたね。

—— そういう時代の中でも、そうしたお話ができた。

南館…西村文太郎先生も印象に残っています。小島憲先生は真面目な先生でしたね。赤神先生はいろいろな話が得意即妙にできるんですよ。小島先生はそういうことがないんです。真面目でしたね。

—— 同期の皆さんとどこかに遊びに行った思い出ですか、そういったことは何か印象に残っていらっしゃることはございますでしょうか。

南館…学生時代は静岡に行きましたね。静岡市の近くに海水浴場がありましてね。用宗もちむねというところです。夏に行きました。用宗の海水浴場の近くに葉問屋さんがありまして、その長男がやはり明治でした。

—— 学生時代に大学周辺で食事をした印象などございますか。

南館…東京にいた時は主に新宿に出ました。酒は余り飲めなかったんです。学生食堂は、結構簡素な感じがしましたね。名前を忘れましたが、学生街にある食堂もよくいきました。私の学生時代は、一か月の仕送りは二〇円でした。それで間に合いました。

—— その当時、下宿代はおいくらぐらいでしたか。

南館…賄いがついて一〇円以下だったような気がしますね。都電の白山下あたりに下宿していました。



応援団の解散と応援指導部の結成

南館…応援団が解散するきっかけになったのは喧嘩です。一九三九(昭和一四)年、野球の明治と早稲田の試合で、明治が勝ちました。私はその試合を観てから新宿に祝勝会に行きました。応援団から、その日の夜六時から日比谷音楽堂で早慶明三大学ボクシングがあるので、学生はその応援に来るように、との話もあったんです。でも私を含め学生の多くは「野球に勝ったんだから」と新宿に行って仲間と飲み会をやったんです。

次の日に学校に行ったら、ボクシングに行った友達が「南館、昨日、明治と早稲田の応援団の間で喧嘩があって、けが人が出たぞ」と言うわけです。それで、それから十日くらい経って軍部から「同じ世代の人間が戦地に行っているにもかかわらず、徴兵が猶予になる大学生が喧嘩とは何事か」との指導があったそうです。それで応援団が解散を命じられたんですね。

——応援団が無くなってしまっ、その後大学主導で応援団に相当する組織を、ということ、応援指導部が作られたんですか。そして南館さんは大学から応援指導部に選抜された。

南館…そうです。当時大学の競技種目が四〇種目以上ありました。応援団がある頃は明治はスポーツの成績が良かったのですが、応援団がなくなった途端、運動部の成績が下がり始めた。「これでは駄目だ」と応援指導部として再編成されることになったんです。

——大学はどうやって南館さんを応援指導部のメンバーに選抜したんでしょうか。

南館…私も全然分かりませんね。大体、その時に学生が昼間と夜で七〇〇〇名くらいいました。応援指導部に選抜さ

南館信也氏聞き取り(吉田・富澤・小笠原・村松)

れたのがその中の約一二名。そのなかから団長にまで選ばれたのは自分でも不思議です。応援のメールは苦手だったしね。ただ柔道の覚えだけはありました。私は岩手水産学校時代、東北六県の柔道大会で優勝しています。学生時代は体重が九八キロありましたからね。

——なぜ選ばれたかはわからないということですが、南館さんが優秀であったことと偉丈夫であったことが関係しているのかもしれないですね。

南館…あと先程話したように、私が無欠席だったことが関係しているかもしれません。私は小学校、高等科、水産学校、大学とすべて無欠席で賞をもらいましたから。内原訓練所で教練された学生をピックアップして、委員などにするのはですね。私も大学から分隊長に選ばれてね。やはり、無欠席だったことがあるのではないかなと思いますけれどもね。

——無欠席だったことも、理由の一つではないかということですね。今、教練の話が出ましたけれども、教練は駿河台の校舎の周りでやっていたのですか。

南館…それはいいですね。内原訓練所で宿泊して訓練されたのです。

——そこで集中してやって、それで単位を付けるという形ですね。

応援指導部に選抜されたあとのような形で南館さんが団長に選ばれたんでしょうか。

南館…一二人の中で誰が団長をするのか、立候補者を募ったところ、応援団経験者二名の立候補がありました。そこで投票をしたところ、二人が同票で何度やっても決まりませんでした。そうしていたところに、司会の大塚政義という私の友人が、「これではいくらやっても同じことだから、私は南館信也君を推薦する」と言ったんですね。そしてこう付け加えました。「彼を団長にして、途中でうまくいかなかったら変えよう。そういう条件だ」と。

ところが私は困ってしまいました。私はそういったグループのリーダーとして活躍したことがないから、辞退したいと言ったのですが受け入れられませんでした。そこで私は条件をつけました。立候補している二人を副団長につけて、全面的な協力をいただきたいと言ったんです。立候補している二人はエールも上手でした。

— そのようにして団長に選ばれたんですね。

応援指導部ではどのような部活の応援に行かれたのでしょうか。

南館…主に野球ですね、ラグビーなども行きました。ただ野球以外の運動部の応援は多くないです。野球部と違って、少ないのです。運動部の応援というのは。

— 応援指導部ですので、学生に「こういうふうに応援しなさい」という指導をされたと思うのですが、具体的にはどんな応援指導をされていたのでしょうか。

南館…校歌や応援歌の練習だけですね。歌うだけです。

— 学生に何か「こうしなさい」という指導をするのではなくて、応援指導部の方々が応援をしていると。

南館…そうそう。

— では、応援の統制というか、みんなでいっせいに拍手するといったことは、この頃は特になかったのですか。

南館…各グループでやるような状態ですね。

— 言葉は悪いですがバラバラにやるということですね。では、応援指導部もそのバラバラの中の一つとして応援するということ感じですか。

南館…応援団から、応援指導部という名前で応援を継承してやることになりましたが、一つのしっかりした形を受け継ぎませんでした。

南館(信也氏聞き取り) (吉田・富澤・小笠原・村松)

——応援団旗を掲げる人とか、何かやる人はいたのでしょうか。

南館…いいせん。その前はあったのですけれどもね。

——応援団時代にあったスタイルを、応援団がなくなって指導部になったから、前の応援団のスタイルを継承してはいけなかったということになるのでしょうかね。

応援歌を伴奏付きで歌うような機会はございましたか。現在のようにブラスバンドと一緒に応援するわけではないですね。

南館…はい、ないですね。応援団が廃止になって、指導部ができましたが、きちんとした方針があったわけではないです。練習にしても学生に応援の指揮を取る方法についても、はっきりしたものがありませんでした。

——前とのつながりが途切れてしまって、本当に手探りでやっていたということですね。

応援歌と「紫紺の歌」

——応援歌ということ当時は校歌しかなかったのでしょうか。

南館…そうだと思います。

——「紫紺の歌」(一九四二年 明治大学応援指導部(当時)作詞⁽³⁾ 古賀政男作曲。当初は「紫紺の旗」というタイトルで発表されていた)は、南館さんが作ろうと提案されたんですか。

南館…応援団が解散して新しく応援指導部できたから、それにふさわしい応援歌を募集したほうがいいのではないかと。ということはこの歌を作ったんですね。

——明治大学のスクールカラーを「紫紺」というようになったのは、この歌からではないかと思うのですが、「紫紺」と命名されたのは南館さんでしょうか。

一九三九（昭和一四）年一〇月一七日付学内新聞「駿台新報」に、校旗に関する記事が出ているのですが、その色を「深紫」と表現しています。「紫紺」という言い方をそれまではしていないようなんです。学内紙など活字では「紫紺の歌」以降「紫紺」という言い方が出てくるように見受けられるんですが。それ以前から「紫紺」と言われていたのでしょうか。

南館…そうですね。それ以前から「紫紺」と言っていたと思いますよ。

——「紫紺の歌」の二番に「紫紺の旗風」と入っていますね。この言葉からタイトルにしたのでしょうか。歌詞の調整をされたとも伺っていますが、どのあたりをご修正されたか記憶はございますか。

南館…いやあ、覚えていませんね。作曲を依頼した古賀先生は、歌っていくうえでうまくいかない箇所があれば、あとで研究して直したら良いんじゃないか、とお話になっていました。

——「そこはどうとでもなるよ」という先生のお考えだったのですね。

南館…そうですね。

——一九四一（昭和一六）年八月にコロムビアレコードから「明治大学応援歌（紫紺の旗）」というSPレコードが出ています。このレコードを作られた時は、南館さんはまだ応援指導部に在籍されていましたよね。歌は霧島昇が歌っていますが、レコードの中で拍手や「オオ！」と叫ぶところがありますが、これは南館さんたちも加わっているんで

南館信也氏聞き取り（吉田・富澤・小笠原・村松）



しょうか。

南館…レコーディングに参加はしてないと思います。拍手などはそうかもしれませんね。

——ここに南館さんのお声が入っているのではないですかね。声紋を一致させるのは難しいですね。(笑)

ところで、作曲の依頼は南館さんお一人で行かれたんですか。

南館…いや、応援指導部五人と明大マンドリン倶楽部の人とで行きました。それで、帰り際、お昼をごちそうになって、古賀先生からお小遣いまでいただきました。

——古賀政男の自宅まで行かれたんですか？

南館…いや、レコード会社です。先程申し上げたように古賀先生は「歌っていてよくなかったら、その時は直すから。大丈夫だから」とまでおっしゃってくださいました。作曲料もお取りになりました。優しい先生でした。

——古賀政男は歌を五線譜に書かれますよね。それを読むのはどうしたのでしょうか。

南館…やはり、明大の学生は大したものです。応援指導部のなかに譜面を読める人がいるんです。私は五線譜が読めないのです。

——歌って聴かせて、それで、「みんなもこう歌え」というふうにやるんですね。古賀政男はレッスンをしてくださいませんかですか。「皆さん、こう歌いなさい」という形で。

南館…それはないですね。

——実際に歌ったら古賀政男から「そうじゃないんだ」ということはなかったわけですね。「紫紺の歌」ができて、応援に使う必要がありますよね。曲を学生にどのように教えたりしたんでしょうか。

南館…それはマンドリン倶楽部がリードしましたね。

——マンドリン倶楽部の方が演奏して、「みんなも歌いなさい」みたいな機会をつくってくれたということですね。その時は、古賀政男が指揮者ですものね。

事前にちょうだいしたメモを拝見いたしますと、淡谷のり子さんの公演の手伝いもしたと出てきます。これは明治大学のサークル、例えばマンドリンクラブなどで淡谷さんをゲストに迎えたりした時の会場整理ですかね。

南館…そうですね。淡谷さんからもお小遣いをいただきました。私の仕送りが毎月二〇円と聞いて「それで間に合うの？」と驚かれていました。それでお小遣いを頂いてしまったのですが、その後淡谷さんが誰かから聞いたように「南館さんは団長さんなの？」と聞かれました。「はい」と返事をする、「どうもすみません。さっきあげたお金を返して」と、おっしゃってお金をお返ししたら、それよりもたくさんお小遣いを頂きました。さすがだなあと感じました。

繰り上げ卒業について

——南館さんは、一九四一（昭和二六）年一二月の繰り上げ卒業をされています。そのことをお尋ねいたします。

南館…戦況が逼迫して、兵士・将校が足らずもう危ないとなりました。学業を続けるのも難しく、一般学生も繰り上げ卒業して、軍隊に召集されました。それで、繰り上げ卒業になったんです。

——その直前まで、応援指導部の団長は務められていたのですか。

南館…そうですね。でもこの時期の活動はもう大したことがないのです。

——突然、「もう卒業試験をやるから」と試験をやって、で、合格すれば繰り上げ卒業になってしまうという形です

か。

南館…卒業試験はありました。

——同級生の皆さんと一緒に繰り上げ卒業になったということですよ。

南館…そうです。ところが茨城（霞ヶ浦海軍航空隊か）で受けた入隊検査で不合格になってしまいました。かなりひどい「痔」があったんですね。

——そのまま一九四五（昭和二〇）年まで宮古におられたんですね。

南館…そうです。

——そして一九四五年に再度招集され、横須賀で入隊された。事前に伺ってびっくりしたのですけれども、応援指導部での友人であった大塚政義さんが、横須賀の司令部の司令官代理だったそうですね。これは全く偶然ですよ。

南館…そうです。大塚とは戦後も長く付き合いがありました。大塚は二〇一五（平成二七）年に亡くなりました。

卒業アルバムについて

——ご持参いただいたアルバムに寄せ書きがありますね。「三省堂の人」とありますがこれはどういう方でしょうか。

南館…団長になって一カ月ぐらいたってから三省堂に行ったら、三省堂の店長さんや喫茶室の店員さんたちが「南館さん、応援団長就任おめでとうございます。今日のお食事は私たちが負担しますから、好きなものを食べてください」と言われたんです。それでご馳走になったんですよ。

——アルバムには食堂の「若松」や「今文」といった名前も見えますね。

南館…ご馳走になったことなど、団長の肩書というのはなかなかだと思いましたね。

——最後にお伺いしたいのですが、南館さんにとって、明治大学応援指導部団長というのはどんな意味を持たれていたのかということをお聞かせください。自分の意思とは異なり、はからずも応援指導部団長に任命されたということですが、今から振り返ってみると、それは辛いだけのご経験だったわけではないと思うのですが、そのあたりはいかがだったでしょうか。

南館…全部自然の流れですね。「よかった」というよりないです。

——長時間ありがとうございます。

注

(1) 一九三六(昭和一一)年設置の学生団体。会長は赤神良護政治経済学部教授。同会は戦時を控え、国防に対する意識向上と心身鍛錬を図り、将来の社会的指導階級たる資質向上を目的とする団体であった。学生の入会資格は厳しく、学科の成績が良好で教練の成績が七〇点以上の者に限ったため、発足当初の会員は一四、五名たらずであり、最盛期でも三〇名弱だった(藤嶋利郎「最近に於ける右翼学生運動に付て」(司法

南館信也氏聞き取り(吉田・富澤・小笠原・村松)



省刑事局『思想研究資料』特輯第七六号、一九四〇年、『明治大学百年史』第四卷（通史編Ⅱ）。

(2)

一九三八（昭和一三）年二月二三日付の同会幹事長中臺國光による「昭和一三年度事業報告」は同会活動の活発な様子を窺うことができる。第一学期に「靖国神社参拝」「ピックニック」「傷病兵士慰問」「研究会」「目次顧問へ記念品贈呈」「中川賛助員先生凱旋祝賀座談会」「野球試合」「国史研究会」「支那事変一周年記念座談会」、二学期には「上海より帰りて」（講演）、「満州軍役奉仕団の帰朝談を聞く」「野球試合」「研究討論会」「靖国神社参拝」「小島、赤神両教授指導の研究会」「武運長久成田参拝」「大塩教授指導の研究会」「大講演会」「座談会」「研究討論会」「米田教授の研究会」などが掲げられる（『明治大学百年史』第二卷 史料編Ⅱ）。

(3)

古賀政男は戦後、「紫紺の歌」の作詞を門田ゆたか（作詞家。「東京ラブソディイなど」の作詞で知られる）に依頼したと述べている。また同じコメントのなかで、古賀の曲が先にあり、それに合わせて詞作を依頼したことを示唆している（作曲家生活50周年記念 古賀政男全集 歌は我が友我が心 一九七七年、日本コロンビア）。なお同書での指摘については、宮本紘視氏（古賀政男音楽博物館主任学芸員）にご教示をいただいた。